

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

ミナミキイロアザミウマの各種薬剤に対する感受性（技術情報第14号）について
（送付）

このことについて、下記のとおり取りまとめましたので、防除指導の参考資料としてご活用下さい。

記

1 目的

他県では、近年ミナミキイロアザミウマの薬剤感受性の低下が報告されている。そこで、県内で採集されたミナミキイロアザミウマの薬剤感受性検定を行い、防除対策の基礎資料とする。

2 方法

(1)供試虫（ミナミキイロアザミウマ2齢幼虫）

個体群名	採集年月	採集場所	採集作物
熊本市個体群	2008年10月	熊本市	キュウリ
合志市個体群	2008年10・11月	合志市（農研センター）	キュウリ

(2)供試薬剤（10薬剤）

系統名	農薬名	濃度
ネオニコチノイド系	アドマイヤー顆粒水和剤	5000倍
	スタークル顆粒水和剤	2000倍
	ベストガード水溶剤	1000倍
合成ピレスロイド系	アグロスリン乳剤	1000倍
有機リン・カーバメート系	マラバッサ乳剤	1500倍
マクロライド系	アフーム乳剤	2000倍
	スピノエース顆粒水和剤	5000倍
その他系統	ハチハチ乳剤	1000倍
	プレオフロアブル	1000倍
	コテツフロアブル	2000倍

(3)検定方法

所定濃度の薬剤に浸漬、風乾したインゲン葉にミナミキイロアザミウマの2齢幼虫を放飼し、72時間後に幼虫の生死を調査した。処理は、各薬剤3反復とし、1反復当たり約10頭を放飼した。

3 結果および考察

- (1) ネオニコチノイド系薬剤は、薬剤の種類によって差が認められるが、その補正死虫率は70%以上であった（図1）。
- (2) 合成ピレスロイド系のアグロスリン乳剤および有機リン・カーバメイト系のマラバッサ乳剤の補正死虫率は、40%以下であった（図1）。
- (3) マクロライド系薬剤の補正死虫率は、70%以上であった（図1）。
- (4) その他系統薬剤の補正死虫率は、80%以上であった（図1）。

(5) 以上の結果から、今回供試したネオニコチノイド系、マクロライド系およびその他系統薬剤では、個体群での差はあるものの、感受性の低下は確認できなかった。これらの薬剤にミナミキイロアザミウマが接触・吸汁すれば、防除効果があると考えられる。

4 防除対策

- (1) 施設栽培でのミナミキイロアザミウマは、気温が上昇してくる2月下旬～3月に増加するため、この時期は防除を徹底する。特に11月まで多発生していたほ場では、厳寒期に発生が確認できなかった場合でも、地中に生存していた蛹が気温の上昇により羽化し、再び多発生する可能性があるため注意する。
- (2) ミナミキイロアザミウマは地中で蛹になるため、薬剤散布時に地中にいて薬剤がかからず、防除ができない場合がある。地中の蛹は温度20℃の条件下で6～7日すると羽化して地上に出てくるため、薬剤散布は1週間間隔で2～3回連続して行う。
- (3) 今回の結果を参考に、使用回数や同時防除する害虫も考慮に入れて、防除計画を立てる。
- (4) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- (5) 薬剤は、ミナミキイロアザミウマが接触・吸汁するように、葉裏まで丁寧に散布する。
- (6) 地域やほ場により薬剤感受性が異なる可能性があるため、薬剤散布後に防除効果を確認する。

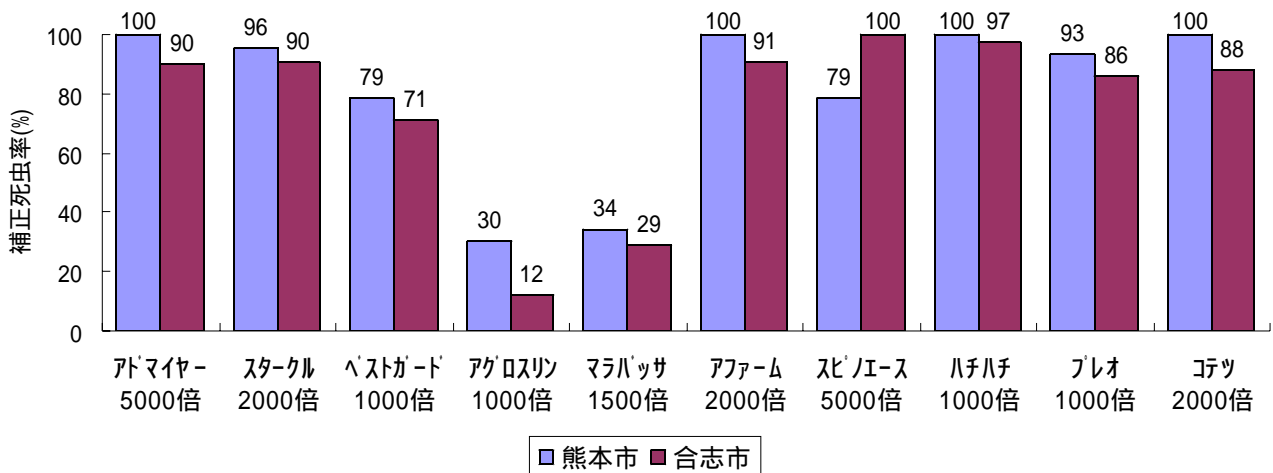


図1 ミナミキイロアザミウマに対する各種薬剤の補正死虫率

なお、本文はホームページ「<http://www.jpnpn.ne.jp/kumamoto/>」上に掲載しています。

熊本県農業研究センター
 生産環境研究所 病害虫研究室
 担当：東、山田
 TEL : 096-248-6490 FAX : 096-248-6493